

ブラジル特報

Notícias e Informações

No. 1618

2014年1月号



コルコバード丘からリオデジャネイロ市街
提供：アルファインテル南米交流

ÍNDICE／目次

新年のご挨拶	2	●日系企業シリーズ	9
大前 孝雄 André Corrêa do Lago		横河電機 ブラジル遍歴 40 年 吉田 聡	
2013～14年のブラジル情勢と	4	●文化評論	10
日本・ブラジル関係		『大邸宅と奴隷小屋』発刊 80 周年と G・フレイレ再考 岸和田 仁	
山田 彰		●エッセイ	11
●社会・文化	6	私にできること、私にしかできないこと Helena H.Toida	
翻訳に夢をつぐむ		イベント・新刊書紹介	12
『ブラジル文学翻訳選集 第一巻』を刊行して			
中田 みちよ			
最近のブラジル政治経済事情	8		
—外務省中南米局提供情報その他より			

発行：一般社団法人日本ブラジル中央協会

〒105-0003 東京都港区西新橋 1-1-15 物産ビル別館 1 階 電話 03-3504-3866 FAX 03-3597-8008

発行人：大前孝雄 編集人：桜井敏浩

URL : <http://nipo-brasil.org/> E-mail : info@nipo-brasil.org/

頒布価：700 円

2014年 新年ご挨拶

大前 孝雄（日本ブラジル中央協会 会長）

明けましておめでとうございます。新しい年を迎えるにあたり一言ご挨拶申し上げます。

先ずは昨年の世界経済を振り返ると、中国の景気減速、世界的な資源価格の下落もあって BRICS をはじめとする新興国経済に一時の勢いが見えなくなったほか、ここにきて世界経済の成長センターとして期待された東南アジアの高成長にも一服感が出ているものの、日米中を中心とした底堅い経済成長により、世界経済は緩やかな回復基調にあるといえるでしょう。一方、国内経済は、安倍政権誕生後、同政権が打ち出したいわゆる「アベノミクス」効果により一気に明るさを取り戻した年といっても過言ではありません。

そんな中、ブラジル経済に目を転じると、2013 年の経済成長率は 12 年実績から改善はするものの、年初の政府見通し 2.7%を下回る見込みで、今年もサッカー・ワールドカップ・ブラジル大会にともなう景気の底上げ効果が期待されるにもかかわらず 13 年の見通しを下回る 2.11%が予測されるなど、停滞感の拭えない状況が継続する可能性が高いと思われます。その背景として一大資源需要国である中国の経済減速が目立ってきたこと、また製造業の競争力が弱いことが挙げられるでしょうが、こうした状況の中でルセーフ政権はインフレ抑制のための利上げというプレーキを踏みつっ、一方で減税・関税引き下げにより景気浮揚のアクセルを踏むという極めて難しい経済運営の舵取りを迫られています。

さて、昨年 1 年間の日本・ブラジル両国関係を振り返ると、5 月の茂木経産大臣、それに続く 9 月の岸田外務大臣のブラジル訪問と、両国閣僚レベルの往来が活発化したほか、民間レベルでも、8 月の日伯戦略的経済パートナーシップ賢人会議、9 月の第 16 回日本ブラジル経済合同委員会、10 月の日伯貿易投資促進・産業協力合同委員会と、両国の官民両レベルでの直接対話が増えた一年といえるでしょう。そうしてこのような対話を通じ、同国の産業競争力強化に不可欠なロジインフラの整備を含む膨大なインフラ需要が見込まれ、2 億人の人口を有し、中間所得層の台頭が著しいブラジルとの経済関係の強化が日本経済の活性化の観点からも重要であるとの認識のもと、①日本とブラジル間の貿易投資関係の促進・強化、②インフラ整備、③



第 1 回日伯貿易投資促進・産業協力合同委員会（2013 年 10 月 25 日 於ブラジル）。左から経済産業省 石黒審議官、三輪駐ブラジル大使、経済産業省 黒田米州課長、筆者。

資源開発における協力等において日本が貢献出来る余地はまだまだ大きいことが確認されました。

こうした両国関係の活性化に向けた流れの中で、ただ一つ残念であったのは、6 月に予定されていたルセーフ大統領の訪日が、その直前に起こった全国規模の政治デモの煽りを受けて中止となったこと、そして 2011 年 1 月に着任されて以来、両国関係の強化に人一倍注力されてきたガウヴォン駐日大使が WTO ブラジル代表に就任のため惜しまれながら離任されたことが挙げられます。

さて、当協会に目を転じれば、昨年 5 月、8 年間にわたり協会の活性化に苦心されてきた清水慎次郎前会長が急逝されるという不運な年となりました。急遽私がその後を引き継ぐこととなり、会長就任に際してのご挨拶でも当協会の目指すべき方向性につき申し上げましたが、清水前会長の遺志を継ぎ、より幅広い層の会員取り込みを目指して、よりオープンでアクセスが容易な協会へと変えていきたい、そのためには協会の体制強化と活動内容の充実が不可欠であり、必要な施策を一つひとつ着実に実行していきたい、そしてこの基本方針に基づき今年の一つでも多くの具体的な成果を上げる年にしたいと思います。

既にその試みは始まっており、昨年は長年の懸案となっていた事務所の移転を完了、さらに、ホームページの改善にも着手しました。この流れを絶やさぬためにも会員数の増強を通じた協会の財務基盤強化が焦眉の急であり、引き続き会員の皆様のご協力、ご支援をお願い致します。

今年は 6 月のワールドカップ開催、10 月の大統領・州知事選挙と、ブラジルが世界の注目を浴びる年となります。当協会としても、新たな時代を迎え活性化の兆しが見え始めた日本とブラジルの関係の一層の強化に向け、今のモメンタムを絶やさぬよう、より活発な活動を行っていききたいと思ひます。そのためにも会員の皆様からの活発なご意見、ご提案を含め、全員参加型の協会運営を通じより輝いて魅力ある協会へと変えていきたい、会員の皆様の倍旧のご支援をお願い申し上げます。

ブラジルと日本、両国間関係のポテンシャルと相互補完性

André Corrêa do Lago (駐日ブラジル大使)

今回、日本ブラジル中央協会の皆様にご挨拶を公式に申し上げる機会に恵まれたことを喜びとします。去る11月7日に天皇陛下に信任状を捧呈し、それ以来、正規の大使としての任務に就いています。

ブラジルと日本の間には多くの相違点があります。際立った文化の違いによる意外性は相手に対する好奇心をもたらし、惹きつけ合う要因となり、これが両国の交わりの最大の特徴かも知れません。また、両国を結びつける人的な絆の存在を忘れてはなりません。笠戸丸が1908年にサントス港に到着して日本人のブラジル移住が始まり、90年代の初頭に日本政府が入国管理政策を見直してから日系人が日本で就労可能となり、双方の国民は相互往来、相互学習、相互理解の循環を積み重ねて来ました。

両国の人々が異なった特質を呈するにもかかわらず、相互理解を求める機運が盛り上がり、互いに惹き付けられるのが大切であり、このような傾向は通商、ビジネス、文化交流、科学技術交流等々の分野でもより広範囲に見られます。

我々ブラジル人は楽観性とバイタリティーを旨とする国民ですが、経済発展を目指すにあたっては日本市場の要求の高さ、さらには日本人の勤勉さ、職業意識、教育水準等々の美德を模範としてきました。最近の10年間に於いて約4,000万人のブラジル国民が中間所得層に引き上げられました。これは国内総生産GDPの成長と並行して国民の社会参加を促し、所得の再配分を促した政府当局の政策運営の賜物といえます。新たに出現した国内の消費市場はより優れた公共サービス、より整ったインフラ、各種のニーズへのより迅速な対応を貪欲に求めています。

ブラジルのこのような新しい社会情勢は、健全な改善圧力を行政当局に及ぼしています。これに応じて政府側は内外の手段を動員して投資の拡大を推し進めています。2013年11月にミリアン・ベウキオール企画大臣が東京で述べた様に、ブラジルでは経済発展を推進するエンジンの多様化が進展しています。2000年頃には、国内総生産を拡大する手段は輸出に限られていました。05年以降には輸出に加えて国内の大衆消費市場が第二のエンジンとして加わりました。07年～09年には前記の2つのエンジンにインフラ整備投資が加わりました。最後に12年から現在に至っては輸出、国内の大衆消費市場、インフラ整備投資、公共サービスの民間委託の4つのエンジンが経済発展を推進する状況に至りました。

このようなシナリオは日本企業に多くのビジネスチャンスを提供します。ブラジルにとって日本は第6位の貿易相手国(2012年現在で157億ドルの通商規模)であり、海外直接投資FDIに関しても13年1～8月の累積で17億ドルを計上して同じ順位を確保しています。二国間貿易は11年に173億ドルのピークを記録し、海外直接投資FDIに関して同年に日本は75億ドルで第4位を占めました。

「プレサル」の名称で知られる超深海油田の開発、国内の港湾施設・空港施設・道路網・鉄道網を整備近代化するニーズ等々は、日本企業に多くのビジネスチャンスをもたらします。ブラジルの造船業界は近年において復活の兆しを示しており、日本の関連企業がこのような傾向に注目しています。先日、東京で両国の造船業界の企業が参加する共同事業の契約調印式に日本政府の関係者とともに立ち会いました。ブラジル側からはリオグランデドスル州のEcovix-Engenix社、日本側からは三菱重工



業、今治造船、大島造船所、名村造船、三菱商事の5社が参加しました。合意を通じて高い付加価値の石油掘削船を建造し、ブラジル沿岸で発見された油田やガス田の需要に対応することを目指しています。

三菱重工を主体とするコンソーシアムがEcovix社に出資した今回の案件以外にも、去る6月にはIHIと他の2社から成る日本企業グループがアトランチコ・スール造船(EAS)とパートナーシップを結び、2012年5月には川崎重工がエスタレイロ・エンセアード・ド・パラグアス社と提携しています。

農業分野においても日本からブラジルに大規模な投資が見られます。去る10月に双日が穀物商社のカンタガロ・ジェネラル・グレインズ(CGG)社と同社の子会社CGGトレーディング社に出資すると発表しました。これを通じて国内の穀物加工業に参入し、さらには日本を含むアジア諸国への輸出によるこの分野での事業拡大を目指しています。双日の出資額は160億円(約1億6,000万ドル)で子会社の40%を取得します。これ等の会社はブラジル側パートナーがサイロと栽培面積拡大用の農地を所有するマラニョン州のポルト・イタキーに投資を予定しています。

三菱商事は2013年6月にブラジルのロス・グロブ・セアグロ社に対する資本参加率を20%から80%に増強しました。大豆を主体とする同社の穀物生産量は年間100万トンに達します。穀物取扱量を20年には500万トンに増強する事を予定しています。11年には三井物産と丸紅が同じくブラジルの農業分野における投資を拡大しました。

何れにせよ、このような好循環をさらに勢い付けるためには、双方の政府高官の相互訪問を頻繁に推し進める必要性を痛感します。2013年を振り返ると5月には茂木敏光経済産業大臣がブラジルを訪問し、さらには前述の如くミリアン・ベウキオール企画大臣が訪日しました。

大使館ではこのような方向を目指して鋭意努力します。ジウマ・ルセーフ大統領の訪日に大きな期待が寄せられていたことは承知していますが、残念ながら予定を変更せざるを得ませんでした。しかし、サンクトペテルブルグ市で開催したG-20首脳会議において安倍晋三総理とブラジル大統領が実り多い実務会談を実現し、両国間の良好な関係を確かめました。

同様に、幕を閉じた昨年に両国はリオデジャネイロ市で8月に「日伯戦略的経済パートナーシップ賢人会議」を開催しました。「賢人会議」は両国間の経済関係を深めるにあたっての戦略的な取り組みを提言する機関です。三村明夫氏(新日鐵住金相談役・名誉会長、日本商工会議所会頭)を議長とする日本側の「賢人会議」の活動に立ち会う機会に恵まれました。「賢人会議」の提言書はルセーフ大統領と安倍晋三総理大臣の両首脳に直接手渡されました。

加えて、私の日本着任に先立って9月23～24日にベロオリゾンテ市で第16回日本ブラジル経済合同委員会が開催されました。

駐日ブラジル大使館の指揮を執るに当たって、両国の間に存在する無限ともいえるポテンシャルを開拓する任務に大きな意欲と刺激を感じます。ブラジルと日本は互いにうってつけのパートナーであり、人的な絆と文化的な絆の緊密化、経済的な関係の強化、通商の増加傾向、投資案件の多様化等々によって一層、親しみを増しつつあります。最後に、このような両国間関係を推し進めるに当たって、日本ブラジル中央協会の皆様が果たして来られた役割の重要さをあらためて特筆して新年の挨拶とさせていただきます。

2013～14年のブラジル情勢と 日本・ブラジル関係

山田 彰

(外務省中南米局長)

新年にあたり、皆様のますますのご健勝をお祈り申し上げます。年頭にあたり、2013年のブラジル情勢を振り返りつつ、2014年のブラジル情勢の見通し、日本とブラジル関係について述べさせていただきます。

2013年のブラジル情勢

2013年、発足後2年を経て政権後半に入ったルセーフ政権は、国民、政界、経済界、メディアからの肯定的な評価を背景に、高い支持率の下、経済成長の回復、インフレ抑制と経済成長の両立、インフラ整備、教育投資、貧困対策への取り組みを進めていました。前政権から続く低所得者向け家族手当（ボルサ・ファミリア）は、開始10年にして、合計3,600万人が絶対貧困から抜け出すという世界最大の所得移転プログラムとなり、このうち2,200万人はルセーフ政権下での成果でした。

ルセーフ大統領は年明け以降、対外的にも精力的に外遊を行い、半年の間にチリ（1月）、赤道ギニア（第3回南米アフリカ首脳会合）およびナイジェリア（2月）、ベネズエラ、イタリアおよび南アフリカ（第5回BRICS首脳会合）（3月）、ペルー（南米諸国連合臨時首脳会合）およびアルゼンチン（4月）、エチオピア（アフリカ連合50周年記念式典）（5月）、ポルトガル（6月）を訪問しました。日本政府としてもルセーフ大統領の6月末の来日に向けて準備を進めていましたが、6月20日（現地時間）、ブラジル国内の大規模デモへの対応のため、ルセーフ大統領の来日延期が決定されました。

2013年6月の大規模デモは、高い支持率を得ていたルセーフ政権にとって予想外の大きな出来事であり、ルセーフ政権の支持率は大幅に低下（57%から30%へと下落）しました。今回の大規模デモは、サンパウロのバス料金が20センターボ（約10円）値上げされたことをきっかけに若者を中心に発生したのですが、6月20日には、全国約100都市で、約140万人以上が参加したといわれるブラジル史上最大級のデモへと拡大。サッカーのコンフェデレーション杯の開催中であったため、取材のためにブラジルを訪問していた各国のマスメディアにも取り上げられ、大きな注目を集めました。

しかしながら、注目すべきは、今回の大規模デモは、いわゆる反政府デモとは異なり、教育・医療、公共交通等の不整備、汚職への反発といった個別分野の政策に対する不満を訴えるものだったという点であり、むしろブラジル社会の成熟度を示すものであるとの指摘もなされています。ルセーフ大統領も、治安部隊によるデモ隊の武力制圧というような強権的なアプローチとはらず、国民に対して、暴力を否定しつつ、民主主義国家における

主義主張の自由を擁護するメッセージを発出し、対話の姿勢をとりながら、デモの沈静化を呼びかけました。

また、ルセーフ大統領は五つの柱による「大社会協約（Grande Pacto）」＜①財政責任の徹底（経済の安定化、インフレ抑制および財政支出のコントロール）、②政治改革（政治改革のための制憲議会設立に向けた国民投票実施、汚職対策、全行政機関の情報公開法の導入）、③医療（「より多くの医師を」計画、医師の育成（医学部枠の増加やインターン実施の義務化）、公共医療施設の充実）、④公共交通（都市交通開発のための投資等）、⑤教育＞を提案し、国民の不満を政策の遂行を通じて解消しようとしています。大社会協約は、与党内での調整が十分でないまま提案された側面もありますが、医療・教育分野については、原油・天然ガス開発に際して連邦政府が得るロイヤリティの収入の75%を教育に、25%を保健に支出することを定める法律（第12858/13号）の裁可、「より多くの医師を」計画法の公布などの具体的な施策が行われました。

大規模デモ直後に下落したルセーフ大統領の支持率は、ゆるやかながら回復傾向にあり、またルセーフ大統領の大規模デモ対応については、多くの人が評価（67%）を行い、マイナス評価は29%にとどまりました。2013年後半、デモは散発的に発生しましたが、暴力をともなうデモは国民の大半が支持せず、その後大規模デモには発展しませんでした。ただし、ルセーフ大統領は、13年後半は外遊を近隣諸国訪問および国際会議出席のためのものに限り、ウルグアイ（7月、メルコスール首脳会合）、パラグアイ（大統領就任式）およびスリナム（第7回南米諸国連合首脳会合）（8月）、ロシア（G20首脳会合）および米国ニューヨーク（第68回国連総会一般演説）（9月）、ペルー（11月）を訪問したに留まりました。なお10月には米国訪問が予定されていましたが、ルセーフ大統領の電話を含む米情報機関による通信収集疑惑が懸案となり、延期されました。

ブラジルにとり、政治的・社会的局面で大きな変動があった2013年でしたが、経済面では、一定の景気回復を見せ、経済成長率約2.5%（13年10月時点、IMF見通し）、外貨準備高も年間輸入額を上回っており、多額の外国直接投資が流入しています。成長加速計画（PAC2、2011～14年）を通じた公共投資も、13年8月までに67.2%実施されました。ブラジル国内では、サッカー・ワールドカップ開催（14年6月）に向けて、空港施設の整備・拡張等のインフラ整備が行われていますが、16年のリオデジャネイロ・オリンピックも念頭に置きつつ、国内のインフラ整備は進められると考えられ、今後、インフラ投資がブラジル経済の牽引力となっていくとみられています。

2014年のブラジル情勢

2014年は、10月の大統領選挙および州知事選挙を控えた選挙の年であり、まだ公式発表はされていませんが、ルセーフ大統領は再選を目指して大統領選挙に出馬するとの見方が一般的です。大統領選挙候補者として、ルセーフ大統領以外にネーヴェス上院議員（PSDB）、カンポス・ペルナンブコ州知事（PSB）、シルヴァ元環境大臣（PSB）、セーラ元サンパウロ州知事（PSDB）の名前が挙がっています。

2013年11月の世論調査では、ルセーフ大統領の支持率の上昇、他の候補者の支持率の低下により、ルセーフ大統領が第1回投票で有効票の過半数を獲得して再選を決めるだろうとの結果も出ていました。13年6月の大規模デモにより国民の政治や社会に対する不満が顕在化したとはいえ、多くのブラジル国民は支持政党を変更したとはいえないようです。労働者党政権が進めてきた「安定的な経済成長と貧困対策（貧困撲滅）強化の両立」については、国民的コンセンサスが得られているといえますが、国民の不満に應えるさらなる具体的かつ効果的な施策が打ち出されない場合の国民の反応および大統領選挙に与える影響については、今後注目されるところです。

選挙までの基本的カレンダー

2013. 10. 5 選挙高等裁判所への政党登録締め切り
10. 5 立候補者の所属政党変更締め切り
(12～1（州知事、議員等に出馬する閣僚）
閣僚辞任・交替か。)
2014. 2 選挙裁判所が選挙日程を発表
4. 5 行政府に属する者が出馬する場合の辞任期限
6. 各党党大会
7. 5 候補者の選挙裁判所登録期限
7. 6 選挙キャンペーン開始
8. 20 TV政見放送開始
10. 5 第一回投票
10. 26 決選投票

日本・ブラジル関係

2013年6月のルセーフ大統領の来日は延期となりましたが、同年9月には、岸田外務大臣のブラジル訪問が実現し、就任後間もないフィゲイredo外務大臣との間で外相会談が行われました。両外相は、日本・ブラジル両国が人的絆を背景とした歴史と伝統に培われた特別な信頼関係にあり、科学技術や産業協力を通じた多層的な協力関係を拡大する多大な可能性がある点で一致し、ルセーフ大統領の来日の実現に向けて調整していくこと、15年の外交関係樹立120周年を両国関係をさらに強化・深化するものとして盛り上げていくことで一致しました。またほぼ時を同じくして、ロシアのサンクトペテルブルクで開催されたG20首脳会合の機会に、安倍総理は初めてルセーフ大統領との間で日本・ブラジル首脳会談を行い、首脳レベルで二国間関係および経済分野での協力促進等についての双方の意向を確認することができました。また、これに先立ち、昨年は5月に茂木経済産業大臣、7月に新藤総務大臣がブラジルを訪問し、それぞれピメンテル開発商工大臣、ベルナルド通信大臣など担当分野の関係大臣との協議を行いました。ブラジルからも、テイシェイラ環境大臣（10月、水俣条約外交会議）、ペルキオール企画予算大臣（11月、

日本ーラ米ビジネス・フォーラム）が来日し、政治レベルの交流が進みました。

経済面では、引き続き世界経済が低迷する中であって、ブラジルは着実な経済成長を遂げつつあり、ブラジル日本商工会議所の会員数も約350と史上最多を記録し、両国の経済関係の進展はめざましいものがあります。

2013年8月には、4年ぶりに、両国経済界の主要なリーダーから構成される日伯戦略的経済パートナーシップ賢人会議がリオデジャネイロで開催され、石油・ガス、再生可能エネルギーと自動車産業、インフラ・ロジスティックス分野への投資、技術・イノベーション、人材育成、第三国における日本・ブラジル協力に関する提言がまとめられました。両国の賢人一同はルセーフ大統領に直接提言を提出し、また日本側賢人は、日本帰国後に、サンクトペテルブルク出発前の安倍総理を表敬し、賢人会議の報告を行い、提言を提出しました。

同年9月には、第16回日本ブラジル経済合同委員会がベロオリゾンテで開催され、両国から300名余りの企業家が参加し、両国間貿易投資関係の促進、インフラ整備、資源開発における協力について活発な議論が行われ、また初めて日本とブラジルのEPA（経済連携協定）の可能性が議題となったと承知しております。日本企業のブラジル進出においては、高率・複雑な税制、硬直的な雇用制度を含むブラジル・コストの是正といった課題はありますが、両国官民双方において、両国の戦略的経済関係の強化にむけた取り組みが今後ますます活発になるものと思われます。日本政府としても、ブラジルにおける日本の民間企業のさらなる活動発展を支援すべく、ブラジル政府に様々な形で働きかけて参ります。

また、ルセーフ大統領が重視するブラジルからの理系留学生10万人送り出し計画（「国境なき科学計画」）の本邦受入れも本格化しており、2013年秋には、47名の学部留学生が来日し、14年春には約100名余りの学部留学生が来日する見込みです。

欧米、中国、韓国がブラジルからの留学生を受け入れ、人材交流を図っている中、本計画が日本・ブラジル間の伝統的な人的絆に加え、次世代の人材交流をはかる好機となるよう期待しております。

2014年は、私も含め世界中の人々がワクワクして待ち望んでいるサッカー・ワールドカップ・ブラジル大会が開催される年です。多くの日本人がブラジルを訪問し、また、マスメディアでもブラジルが多く取り上げられることでしょう。さらに、15年には日本ブラジル外交関係樹立120周年、16年にはリオデジャネイロ・オリンピック・パラリンピック競技大会、20年には東京オリンピック・パラリンピック競技大会が控えております。こうした機会を通じて、日本とブラジルの間の人の往来が活発化し、相互の関心も高まるものと思われます。このような中、日本ブラジル中央協会の果たす役割はますます大きくなると考えます。引き続き、皆様のお力添えを賜れば幸甚です。

（本稿は筆者の個人的見解であり、外務省の見解を代表したものではありません。）

翻訳に夢をつぐむ 『ブラジル文学翻訳選集 第一巻』を刊行して

中田 みちよ（『ブラジル日系文学』編集長）

2013年10月初旬に出版された『ブラジル文学翻訳選集』の発行元は、ブラジル日系文学会。1965年に創刊した「コロニア文学会」がその母体となっている団体で、文学愛好者60名の創立会員をもって始まったものです。会長には当時日本文化研究所の所長だった鈴木悌一が推されています。第5号発行時には会員が450人、まもなく会員は800人を数える大所帯となり、それを当時の朝日新聞の文芸時評はこう伝えています。

【……日本国内の一流同人と引けをとらない。内容も相当に豊富で、水準も全体に粒が揃っており、かなり高い。……距離の遠さを頭においてページをめくると、やはり在伯邦人の層の厚さを感じて驚かざるを得ない。その裏には長い移民の歴史があることを思うと、感慨も沸く。つまり、こんなにこなれた日本語の通用している日本人社会というものに、ふと、あっけにとられる……】

言葉はそれほどやすく習得できないことを身をもって知っている私は、なぜ、あっけにとられたのか、そちらのほうが気になりましたが……。次の文がそれを代弁してくれました。

【この驚きには、たかが移民の日本語であるから期待するものはあるまい、という前提意識があり、その意識が砕かれた驚きであろう】

と日系文学の先達 安良田 済（『ブラジル日系コロニア文芸 下巻』2008年 人文研究叢書 第7号）が述べているのです。多くが出稼ぎ移民であり、母国での生活は質素で、相対的にまた素養も低く、文学を趣味とするものは少なかったことを思えば、この観察もまた当然であるとづけています。しかし、一方では、

【生業以外にもっとも広くつながりを持ちながら絶えることなく行われてきたのは、文学とスポーツであった】（『日本移民80年の歩み』91頁）

といわれるほどに、根強く生きてきたのも事実です。

一世の高齢化で会員減少

時は過ぎてゆき、一世会員の高齢化とともに文学熱も下火になり、現在会員は250名ほどです。1984年からは「武本文学賞」が設置されて低迷する志気を鼓舞することになり、さらにその文学賞のなかに翻訳部門が加えられたのが1996年。受賞作が出た年も出ない年もありましたが、すでに15年余が経過しています。言葉の壁があつかった移民一世には、ブラジル文学はなじみが薄く、同時にまた優れた翻訳作品に恵まれないこともあって、敬遠されてきま



『ブラジル文学翻訳選集 第一巻』と『ブラジル日系文学』誌

した。しかし、その根底には「ブラジルに住むからにはブラジルの文学作品の一つや二つは読んでみたい」という願望もまた執拗にありました。

ブラジル文学の邦訳に関しては、1921年に聖州時報（『半田知雄その生涯』112頁）がプリアト・コレア作「南十字星」を掲載したのが緒で、笠戸丸から12～3年後のことです。訳者は杉山帆影。杉山は翌22年にもベルナルド・ギマランエス作の「奴隷の娘」も手がけています。この後、散発的に幾人かが翻訳作品を誌上に発表していますが、単行本になって上梓されたのは1939年のアンドウ・ゼンパチの「肉欲（ジュリオ・リベイロ作）」が初です。1935年にパウルーからサンパウロ市に進出してきた聖州新報の文芸欄に掲載されたもので、後に単行本として遠藤書店が上梓しました。

悔やまれる時系列無視の編集

さて、この翻訳選集について述べると、選集には一応、一流とみなされる作家の34編の短編が収録されています。また訳者は日本在住で、すでに何冊も翻訳本を上梓している会員の小高利根子を除けば全員素人、翻訳が好き、文学が好きという者ばかり。

こうして一冊の本に編んでみるといまいとつ悔いが残るのは、作品を時系列的に並べなかったことです。単純に雑誌掲載時順に並べたために、ブラジル文学の歴史的な流れがつかめないという嫌いが出ました。これはまあ、文学賞設置時の選考委員の見識のなさにもつながりますが、委員に文学博士の脇坂ジェニが顔を出したあたりからすでに指摘されていたことでした。しかし、いまさら如何ともしがたい、というのが実情です。

ドン・ジョアン六世がブラジルに王室を移したのが1808年。このときからブラジルの文明開化がはじまります。まず、ブラジル文学の最高峰といわれるマッシャド・デ・

アシスの没年が王室移転から100年目の1908年。6月には日本移民がサントスに第一歩を踏み出した年なので非常に記憶しやすく、このあたりから、ブラジル文学をひもとくと頭に入りやすい。少なくとも私はこういう形でブラジル文学の門をたたきました。

独学の彼が編集者に抜擢されたのが1867年で将軍慶喜の大政奉還の年です。ですから時代も思想も古臭いのは当然。マッシャドの作品は旧弊な叙述スタイル。常に外側で叙述する語り手があるので、無声映画の弁士的な人物がいると考えればこれも分かりやすい。もっとも、名声のわりには、読んでみて面白くない作家です。

しかし、マッシャドの翻訳作品がずいぶん多いじゃないかと反問がでそうです。この選集にだって三編（本屋のガルニエル・男親と女親・クロニカルの誕生）も掲載されている……。これには翻訳の著作権の絡みという楽屋裏のハナシがあるのです。マッシャドは死後100年を経ていて、著作権の縛りがなくなり、天下晴れて翻訳ができるからなのです。ブラジル日系文学も翻訳の課題作品には著作権が消失したものを、という条項を加えていますから、古臭いカビたようなハナシ（作品）が多くなるのは当然の成り行き。現在は少し、現代的なものをということで45年組（後述）の作品も出すようになって、それだからこそ、選集は非売品ということになってしまいました。

最近ブラジル政府はかつて死後60年だった著作権有効期間を70年まで引き上げました。ブラジル文学の振興に水を差すと腹を立てているのですが、政府としては財源確保に何%かを徴収することにしたのだそうです。出版社もエージェンタたちも時代に逆行するとブーブーだそうですが、ブラジル文学が世に流布するためには、政府の援助支援こそが肝要なのに……育てるところか食い物にしたがつている……が顰蹙を買う理由です。

一方、この年に生を受けたのがギマランエス・ローザで、これまたブラジルを代表する作家です。軍医、後に外交官になります。1946年「サガラーナ」という地方伝説をまとめた作品で世に出ますが、結局、これが生涯彼の創作の中核をなします。マッシャドと同じように難解で、方言を用いた造語も多いのですが、作品には香気が漂い読み手を酔わせます。もうひとつ、マッシャドの辞書には「にほんじん」はなかったのですが、ローザは小品「ジバング」を残しています。ノロエステ鉄道を走る汽車の中で見かけた日本移民のハナシで、綿栽培を目的に共同体を形成していた様子がしっかり捉えられています。

1922年からモダニズム始まる

そして、この日本移民が渡ってきたころからブラジルの近代主義が始まります。当時ヨーロッパでは文芸面に限っていえば、若い文士や芸術家による反抗のマニフェストを掲げた前衛主義が起こり、ヨーロッパに留学していたアニ



「ブラジル日系文学会」翻訳サークル「アイリス」の皆さん
前列右から 平松さちえ、柴門明子、中田みちよ
後列右から 堀麻紀子、関屋八重子、古川恵子、原信夫、坂口民生

タ・マウファッチ（画家）やヴィクトル・ブレッシエ（彫刻家）、オズワルド・デ・アンドラーデ（作家）たちが行動を起こします。自分の国に即した思考改革を行おうと、1922年の「近代芸術週間」になるわけですが、ブラジルの芸術一般はこれを境に変貌を遂げるようになります。乱暴ないい方をすれば第二次大戦を境にしたような境界線です。

しかし、この22年から始まったブラジルのモダニズムも、後にまた分裂します。考えてみれば、思想的にまとまったわけではなく、いわば革新を担う時代のバスに乗り遅れまいとして形成された第一期ですから、旧弊さを払拭できない作家もいたわけで、分裂もまた必然なのですが、確固として地位を守った作家として選集に掲載されているのはセシリア・メイレイレス（「幸福」）、リペイロ・コウト（「夜明け前の物語」）などです。それから30～45年までが第二期。これは近代主義が具体的な形をもって現れたときで、カルロス・D・アンドラーデ（「バッグと人生」）、ジョルジ・アマードなど。

初期のモダニズムに異を唱えて現れたのが45年以降の第三期で、これが現在までつづいている流れです。グラシリアノ・ラーモス（「バレイア」）、ギマランエス・ローザ（「孤愁の父」）、リジア・ファグンデス（「渡し舟のクリスマス・レオンチーナの告白」）クラリッセ・リスペクトル（「パンを分かち合う」、「密やかな幸せ」）など多数です。一般的には45年世代とも呼ばれます。ほとんどが現代ブラジル語で書かれていますから理解しやすい分、日本語の表現力が問われるような気がします。今、サークルではネルソン・ロドリゲスの短編に取り組んでいますが、問題は得意のブラック・ユーモアをどう捌くか、です。楽しいですけれどね。

とりあえずはまもなくブラジルでサッカーのワールドカップやオリンピックが開催されることで、世界の視線がブラジルに注がれます。なかんずく、日本の目がブラジルに集中するでしょう。この選集がそのブラジルを、ブラジル人を知るための水先案内人になれば、望外の喜びです。

最近のブラジル政治経済事情

—外務省中南米局提供情報その他より—

2014 年の大統領選挙と ルセーフ大統領の支持率

12月1日付フォーリャ・デ・サンパウロ紙は、明年の大統領選挙に関するダタフォーリャ社の全国194市の4,557人を対象に実施した世論調査によれば、現時点における大統領候補の支持率は、ルセーフ大統領(PT)は前回10月11日の調査時よりどの候補者との選挙になるとしても支持率を3～5ポイント伸ばしている。シルヴァ元環境相(PSB)、ネーヴェス上院議員(PSDB)、カンポス・ペルナンブコ州知事(PSB)、セーラ元サンパウロ州知事(PSDB)の候補者と比較すると、シルヴァ元環境相が出馬する場合を除き、ルセーフ大統領は第1回の投票で有効票の過半数を獲得し再選を決めるとの結果が出ている。PSBがシルヴァ元環境相に、PSDBがネーヴェス上議に候補を絞った場合は、ルセーフ大統領の支持率は42%、二人が26%+15%=41%で、±2ポイントの誤差を考慮すれば、決選投票にもつれ込む可能性はあるとされている。しかし、決選投票になればいかなる場合もルセーフ大統領が支持率を伸ばして相手候補との差を広げている。

この時点でのルセーフ大統領の支持率は41%（前回より3ポイント増）と、デモ発生前の最高値65%（13年3月）には未だ及ばないものの、評価は再び高まってきている。しかし「次の大統領には今と違った政策を取って欲しい」と答えた回答者は全体の66%に上り、「現在の政策を踏襲して欲しい」の28%を大幅に上回っており、ルセーフ大統領支持派の中にも現状に不満をもつ者が少なからず存在することを示している。

なおシルヴァ元環境相は、新党Rede（持続可能なネットワーク）を立ち上げようとしていたが、10月3日にTSE（選挙高等裁判所）に否認されたため、カンポス知事が率いるPSB（ブラジル社会党）への移籍を発表、同党は現在のところは、選挙にはカンポス大統領候補、シルヴァ副大統領として出馬させるものと見られている。

OECD 対ブラジル経済報告発表

OECD（経済開発協力機構）のグリア事務総長（元メキシコ蔵相）が10月22日にブラジル来訪し、対ブラジル経済報告書を発表し、

「ブラジルは世界で最も大きな経済の一つであり、世界経済が低迷する中でしかるべき成長を遂げ、その恩恵がより均等に配分されていることである。ボルサ・ファミリア等の効果的な政策で、貧困率は低下し、所得格差は縮まり、この10年間で4,000万人以上が中間層に加わった。とはいえ、貧困水準の地域間、世帯間の不公平を縮小させることは、ブラジルにとって最も大きな課題。また、ブラジルの国際貿易への参加やグローバルな生産チェーンへの統合は期待したほど進んでいない。これらの問題を解決するため、ブラジルは構造改革に踏み出す必要がある。マクロ経済運営は財政赤字を削減し、インフレ目標を維持することを引き続き目指す、生産性向上のため教育への投資、労

働者の訓練、起業家の育成、インフラストラクチャー整備、より負担の少ない税システムの構築も必要である。」

と語った。

OECDの対ブラジル経済報告書の概要は以下のとおり。

ブラジルはより包括的な経済成長(more inclusive growth)を達成しつつある。安定的かつ予見可能なマクロ経済政策がこれを下支えしている。国際的な経済危機は、生産性とコスト競争力の欠如を如実のものとした。成長を妨げる供給サイドの制約には、インフラのボトルネック、高い税負担率等が含まれる。硬直的な労働市場および熟練労働者の不足は、賃金引き上げの強い要因となっている。

持続的な成長は、天然資源の持続的使用によってもたらされた。エネルギー生産は再生可能なエネルギーに強く依存している。エタノールは重要な構成要素であるが、国営石油企業の多くはガソリン価格を輸入価格より低く抑えており、エタノール産業を圧迫している。炭素排出量は減少し、森林伐採のペースは落ちたが、現在の伐採のペースは5～6年毎にベルギー（またはアラゴアス州）の面積の森林が破壊されていることを意味する。

経済成長の恩恵をより広範囲に拡大する政策に成功したため、貧困と所得格差が実質的に減少した。教育へのより幅広いアクセスにより、より多くのブラジル人がより収入のよい仕事に就くことが出来た。しかし、教育水準は教育システムの拡大と整合していない。学校インフラの欠如は深刻であり、かなりが中等教育段階で落後する。職業教育を行うセクターも増加しつつあるとはいえ小さい。他方、税制度は累進制が低く、再配分効果は低い。

「より多くの医師を」計画法の公布

7月8日の暫定措置令621号に基づき実施されていた「より多くの医師を(Mais Medicos)」計画を立法化する法案が議会で可決され、ルセーフ大統領の裁可を受けて10月22日付法律12871号として公布されたことにより、継続的な施策として実施されることとなった。

(1) 医師の育成—医学部を卒業し、専門科に進む条件として初年度は家庭医学・地域医療を含む総合診療科のレジデント・プログラム受講が必修となり、医学部教育課程(6年間)での2年間のインターンにおける必修時間の少なくとも30%は、SUS(統一医療保健システム)および救急医療に充てられることとなった。

(2) 医師の登録—現在1,232人の医師が活動を行っている。うち748人がブラジル人、484人は外国人で、CRM(ブラジル地域医療審議会)で証明された国外の医師免許で活動を行っている。これ以外に196人の外国人が手続き中である。10月末からさらに2,180人の国外で教育を受けた医師が活動を開始することになっているが、一部報道によれば、うち2,000人はキューバ人医師とのことである。これにより、およそ3,500人の医師が活動することになり、SUSを利用する1,200万人を超える人々に裨益することとなる。

第 28 回

横河電機 ブラジル遍歴 40 年

吉田 聡
＜ YSA 南米横河（有）社長＞

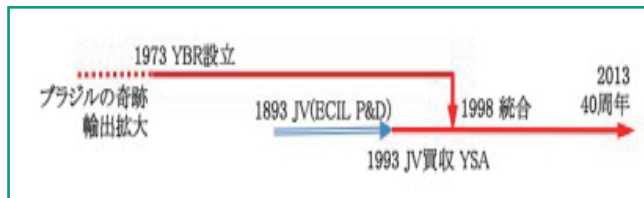
横河電機は 1915 年設立より 98 年間、一貫して計装制御機器、および計測機器の生産販売を続け、高品質の制御機器、センサー、および計測機器類を世界中のあらゆる産業へ供給してきました。計測制御機器類が実現する安全で効率的な操業により、お客様が品質の高い安価な製品を世に送り出す事を可能にし、これを通じて社会に貢献することに努めてまいりました。

弊社の南米における歴史は、1960 年代から始まるブラジルの奇跡と呼ばれた時代に、鉄鋼、アルミ、マイニング、石油化学、ガス、薬品、紙パルプ、食品、インフラストラクチャーほか多岐に渡る弊社お客様の進出にともなう多くの弊社製品もブラジルに渡ってきたことから始まります。そして、それらのプラント立上げ、増改造、修理など現地サービス体制の需要に応えるため、1973 年 11 月に Yokogawa Eletrica do Brasil (YBR) を設立し、国産化政策による幾多の変遷を経て、現社名 Yokogawa America do Sul (YSA) となり、今年で法人活動 40 周年をむかえました。

◆ 1970 年代 ◆

Yokogawa Eletrica do Brasil(YBR) の設立

YBR はオートメーション機器ならびに計測器の輸入および一部国産化を進めることにより業容を拡大してきましたが、1979 年、工業計器の輸入制限が始まり、YBR の活動は後に 92 年以降外資の参加が自由化されるまで、計測器の国産および輸入販売に限定されることになります。その間も工業計器の現地企業への技術移転や代理店契約を統括管理し、86 年には現 Santo Amaro 工場を建設するなど次世代への備えを行った結果、98 年現 YSA と統合するまでの 25 年間、YBR の社名の下で横河独自の経営を継続することが出来ました。（下図参照）



◆ 1980 年代 ◆

ブラジル資本による JV（ECIL P&D）設立

1982 年には当時最新鋭のコンピューターベースの制御システムにおいても国産化政策が実施され、1992 年に外資の参加が自由化されるまでの約 10 年間は、国策に沿って、国内資本によるジョイントベンチャー ECIL P&D 社に対して 4 世代にわたる新製品の技術を移転し続けるこ



法人活動 40 周年を迎えた南米横河 Santo Amaro 工場
(Alphaville に本社営業所)

とにより、ブラジルの工業振興に尽くしてきました。85 年からはトレーニングセンターを開設し、ユーザー様のエンジニアやオペレータおよび大学とも連携して学生も含めてのプラント制御技術ならびに計装教育を開始、以来 28 年間で約 18,700 名の卒業生を送り出しました。JV パートナー様の活躍も素晴らしく、ブラジルにおける横河ブランドの制御システムのシェア No.1 を確保し現在も継続しています。

◆ 1990 年代 ◆

JV の経営権取得、YBR の統合、 南米統括拠点化

1993 年、外国資本参加の自由化にともない、現地資本の JV である ECIL P&D を買収し社名を現在の Yokogawa America do Sul (YSA) とし、98 年には計測事業の YBR とも統合を果たし現在に至っています。

◆ 2000 年代 ◆

経営の現地化と南米各国への進出

YSA の経営が安定軌道に乗ったことを踏まえ、2000 年には最後の日本人駐在を引上げ、ブラジル人社長へ経営を移譲し、いち早く経営の現地化を実現しました。また、ブラジルビジネスをさらに拡大するとともに、南米統括会社へ格上げし、チリ、アルゼンチン、ペルー、コロンビアに拠点を設け、活動基盤の整備拡大をしてきました。

◆ 2010 年～ ◆

南米市場の更なる拡大に備えた イニシアチブ強化

サッカーワールドカップおよびオリンピックを開催するブラジルを中心として、今後とも継続して成長が期待される、人口 3 億を擁する南米経済圏への活動をさらに強化するため、2012 年から経営を日本人駐在員に戻しました。現在 YSA はキューバを含む南米全域に活動を拡大し、従業員 420 名を擁しています。今後とも安全と生産性と環境保全を、高いレベルで実現する高度制御などソリューションプロバイダーとしての活動に加えて、人材の育成・教育等の面でも活動を継続し、ブラジルおよび南米各国の産業界の競争力向上に、微力ながら貢献を果たしてまいります。お客様、パートナーの皆様には、さらなるご支援ご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

『大邸宅と奴隷小屋』 発刊 80 周年と G・フレイレ再考

●岸和田 仁（『ブラジル特報』編集委員、在レシーフェ）

植民地期の家父長制の下で、欧州（イベリア）文化、先住インディオ文化、アフリカ黒人文化が相互に影響し合っただけでなく、ブラジルの伝統的文化が形成されたが、この文化融合性、混血性をポジティブに捉えよ、と主張したことで、当時の知識層に「革命的な力と解放的な衝撃」（批評家アントニオ・カンディード）を与えた、社会人類学者ジルベルト・フレイレ（1900～87年）の著作『大邸宅と奴隷小屋』の初版発刊（1933年）から80年が経過した。

この発刊80周年を記念した講演イベントが、10月20日、レシーフェ旧市街にある「郵便文化センター」にて開催されたので、筆者も参加してみた。この講演は二部構成で、前半はアンコ・マルシオ・ヴィエイラ教授（ペルナンブーコ連邦大学）の『『大邸宅と奴隷小屋』を再読する—ジルベルト・フレイレ、ロジェ・バステードと人種デモクラシー概念』、後半はマリア・ルシア・バーク教授（ケンブリッジ大学上級研究員）の「ジルベルト・フレイレのレシーフェ」、であった。ヴィエイラ教授は、「人種デモクラシー」概念への批判を踏まえてフレイレ再検討を行い、彼の軍政への関与も含め総合的なフレイレ像について熱のこもった講演を展開した。マリア女史は、都市社会学の視点から、ディケンズにとってのロンドンと比較しながら、フレイレにとってのレシーフェは、衣食住すべての有形・無形文化遺産が研究対象になったと、いくつもの具体例をあげていった。また、彼女の新著『挫折の凱旋』において、詳細にその生涯を跡付けた、ドイツ人類学者ルディガー・ビルデンがどれほどフレイレに知的影響を与えたか、についても語ってくれた。

マリア女史の青年フレイレ研究『ジルベルト・フレイレ—熱帯のヴィクトリアン』（2006年）を熟読して感動した経験を有する筆者としては、講演終了後の彼女と20分くらい意見交換を行うことができて、いささか満足してしまった次第だが、この機会にあらためてフレイレについて考えを巡らせてみた。

多義性を有するフレイレの業績については、近年、ブラジル国内でも国外でも、様々な研究がなされるようになってきたが、筆者は、彼の評価については、時系列的に三期に分けるのが妥当と考えている。すなわち、(1) 混淆文化をポジティブに主張するラディカル革新派とみなされた1930年代から50年代、(2) 人種デモクラシーを信奉し、軍事政権を積極的に支持する保守派にして、アフリカにおけるポルトガル植民地主

義の擁護派とされた1960年代から80年代、(3) フレイレ批判の牙城であった“サンパウロ学派”においても、再評価が進められるようになった1990年代以降、の三期である。

最近のフレイレ再評価の流れのなかでも、英文による著作として特異の位置を占めるのが、マリア女史と夫君ピーター・バーク教授との共著によるフレイレ研究であろう。バーク教授については、その広範な文化史研究は日本語でも読めるので（『ヨーロッパの民衆文化』人文書院1988年、『イタリア・ルネサンスの文化と社会』岩波書店1992年、『フランス歴史学革命—アナル学派1929-89年』岩波書店1992年、『文化史とは何か』法政大学出版会2008年など）、日本でも広く知られた歴史学者であるが、ブラジルでもそのほとんどの著作が翻訳され、時々、サンパウロの新聞（『フォリャ・デ・サンパウロ』）にエッセイを寄稿したりするので、ブラジルでも影響力を有する学者である。（というよりも、ポリグロットのバーク教授は、チェコ語やフランス語で作家活動をしているミラン・クンデラのインタビュー記事をブラジルの新聞で読んで、クンデラ文学の変化を論じたりしている。）

彼の“世界市民性”を如実に示す、最新翻訳書『文化のハイブリディティ』（法政大学出版会2012年）は、エドワード・サイードの箴言「あらゆる文化の歴史は、借用の歴史である」や、レヴィ＝ストロースの「あらゆる文化は寄せ集めの結果である」といった発言の意味するところ、すなわち文化の循環性とか文化の均質化とか、について、長年にわたる文化研究の成果を整理しながら論じたもので、その博覧強記には圧倒されることになる。

そんなバーク教授が、もともとサンパウロ大学（教育学）で教鞭を執っていて、フレイレ批判派であったマリア・ルシア夫人と共作でフレイレ再評価を行った著書の英語版タイトルは『ジルベルト・フレイレ—熱帯における社会理論』（2008年）で、ポルトガル語版は『熱帯を再考する—ジルベルト・フレイレの知的肖像』（2009年）となっている。

フレイレの全著作を読み込んだうえで、多くの研究者による指摘・批判も織り込みつつ、フレイレ理論の革新性と保守性を語っており、一言でいえば、「フレイレ研究の最新到達点を示す」作品になっている。その最終章（7章）を、同時代人としてのフレイレ、としているところからも、バーク夫妻の視点は明らかであろう。

私にできること、私にしかできないこと

Helena H.Toida

(上智大学外国語学部ポルトガル語学科教授)

上智大学ポルトガル語学科の教員(非常勤講師も含めて)になってより、はやいもので18年が経つ。それ以前の留学時代を数えると、日本滞在は4半世紀にもなる。時はいつも密やかに流れ続けるのだなと実感しているこの頃である。日本近代文学の研究のために来日したが、こんなに長く留まることになろうとは思ひ及ばなかった。両親もブラジルに移住したときは、同じ思いだったのだろうか。娘が自分たちと逆の立場になろうことなど想像もしなかったであろうが。

1930年代、当時の多くの農村出身の人々がそうであったように、両親はブラジル移住を余儀なくされた。私が中学生の頃、父は「ブラジルに剣道を広めようと思って来たのだ」といったことがある。彼の生き様を振り返ると、「仕方がなかったのだ」と思うより、剣道に希望を見出し、それを生きる支えとしたのではないだろうか。あらためて振り返ると、そのように思えてならない。父の一生は剣道を中心に回っていた。今思えば、自分の理想に忠実に生き抜いた人だったと、納得がいく。母はいわゆる昔の女性らしく、黙って父に従っていくだけだった。馴れない異国暮らしで、どれだけの不安と理不尽を味わったか計り知れない。両親にとって祖国「日本」は絶対的な存在だった。そしてその想いが強くなるにつれて生じるのが「故郷の美化」である。

日本は素晴らしい国だと聞かされ続けて育った私が、両親のそんな思いを自分の中に取り込んだのは極めて自然の成り行きだった。そんなことから、私の日本文化、文学への憧れは根付き、高じて大学では日本語を専攻した。そして初めての留学—これがアイデンティティ・クライシスの引き金となった。

日系二世である私は、外見は日本人であることから、ブラジルでは *japonesinha* (日本人のお嬢ちゃん) といわれ、日本では「日本人らしくない」といわれた。「私って何人？」とその度に悩んだ。何の疑いもなく、「自分は日本人だ」と思っていた幼少時代。留学時代、日本人に囲まれて初めて「私は日本人ではない!」と気付かされた。「私は誰よりもブラジル人らしいし、日本人にはなれない」と確信した瞬間だった。私にしかできないことがある、二つの世界に通じていることが大きな力になるのだと実感した時でもあった。

日本に残ることに決めたのは、個人的な理由もあったが、何よりもまず教える仕事ができるのなら、「コスモポリタン」の私は、どこにいてもいいと思えたからである。翻訳や通訳—なかでも法廷通訳は貴重な経験だった—、語学学校の講師を経て、縁あって上智大学ポルトガル語学科で教えることになった。ブラジルにいた頃は大学や語学学校で日本語を教えていたが、まさか日本語で

ポルトガル語を教えることになろうとは思わなかった。

初めて日本の大学生たちと向き合う中、どうすれば教授法を体系化できるのか、ポルトガル語の世界は日本人の目にどのように映っているのか等について研究する日々が続いた。ブラジルで日本語を教えていた経験と、日本でポルトガル語を教えることが、自分の言葉を再認識するのに役立った。そしてこれらの経験は、自分を見つめなおす機会にもなったのである。

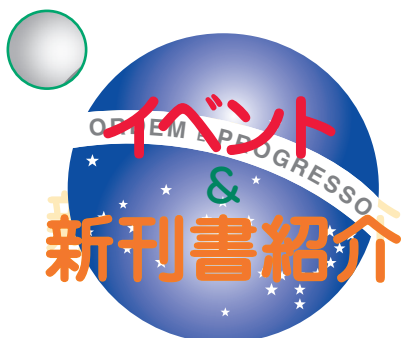
一時期は思い悩んだアイデンティティであるが、日系ブラジル人であることを逆手にとって、二つの言語世界—日本語とポルトガル語—を自由に行き来できると思えば、これ以上の楽しさはないということに気付いた。「日系人は面倒だ」と批判する人もいる。確かにそうかもしれない。何となく日本のことをわかっているようで、日本語も少しばかり話すが、実際のところ何も分かっていないから、扱いにくいということか。私はしかし、それを自覚しながら自分にできることをしたい。これが異なる者同士が共に生きるための第一歩であると思うからだ。

このたび知人の縁で、気仙沼市の牡蛎(カキ)の養殖家である畠山重篤氏が書かれた、『カキじいさんとしげぼう』という童話のポルトガル語への翻訳を担当させていただいた(注)。作品には海と森とが密接な環境連鎖にあること、その均衡を保つことの大切さについて書かれている。人間と自然との共生は一見難しそうに見えるが、実はひとり一人の小さな勇気がその実現への一歩になると畠山氏は述べている。動物であれ植物であれ、生きる場所を失うということは、生きる意味を失うことに等しい。

「私は何者なのか」と、かつて「生きる場所」に苦悩した私は、畠山氏のこの「小さな勇気」に応えたいと切に願いながら、翻訳に取り組んだ。完成した時、私は二言語間を行き来できることに再び感謝すると同時に、自分が日系人であることの意義を一段と深く感じる事ができ、それこそが私にしかできない仕事だと心から思えたのである。

(注) 本書については、本誌12頁の「新刊書紹介」参照。





協会ホームページの リニューアル

12月から協会ホームページ <http://www.nipo-brasil.org/> が一新されました。掲載項目を整理して上段・左段から見たい項目に入りやすくし、各項ごとの写真もブラジルの多彩な面を表すよう変えています。今後は会員皆さまや閲覧される方々のご要望に応じて、出来るだけ様々なブラジル情報を載せ拡充していきたいと思ひます。皆さまからのご意見、ブラジルに関わるイベントや情報、写真の投稿をお待ちしています。

★ イベント ★

☆第25回ランチョン・ミーティング

日時：2014年1月29日(水) 正午～午後2時

講師：清水 正氏 (株式会社エコヘッツ代表取締役社長)

演題：「日本の中小企業のブラジル進出支援策ー養鶏・農業から工業製品まで」。ブラジルでの日本地鶏プロジェクト立ち上げに絡んでお話しします。

場所：アークヒルズクラブ (アーク森ビル イーストウイング37階) 東京メトロ南北線「六本木1丁目」または銀座線「溜池山王」下車

参加費：会員 5,000 円 非会員 6,000 円 (当日会場にて申し受けます)

申込み：先着順 50 名様まで。食事手配の関係上、必ず事前に協会事務局へ。お申し込み後ご欠席される場合で、1月28日(火)午後5時までにご連絡頂けない

場合は、参加費ご負担をお願いいたします。

その他：ドレスコード (男性) ジャケット・ネクタイをご着用下さい。

☆新駐日ブラジル大使歓迎会

コヘーア・ド・ラーゴ新大使の歓迎会を在日ブラジル商業会議所と共催で開催します。

日時：2014年1月24日(金) 午後7時～9時

場所：ザ・ペニンシュラ東京 東京都千代田区有楽町 1-8-1 電話 (03)6270-2888

東京メトロ日比谷線・千代田線・都営地下鉄三田線「日比谷」、有楽町線「有楽町」下車

参加費：日本ブラジル中央協会／在日ブラジル商業会議所 会員 10,000 円、非会員 12,000 円

☆ポルトガル語冬季講座

初級Ⅰ：1月14日～3月18日(火曜) 岸和田マリレーネ先生

初級Ⅱ：1月15日～3月12日(水曜) 古庄マリア先生

中級：1月17日～3月14日(金曜) 上運天ミゲル先生

上級：1月16日～3月13日(木曜) 三浦マリエ先生

時間：いずれも 19 時～21 時 各クラス全 9 回

場所：当協会教室

受講料：全クラス共通

協会会員 22,500 円

非会員 28,500 円

お問い合わせ・お申込：協会ホームページから直接、または事務局へ e-mail、Fax で。

★ 新刊書紹介 ★

☆『世界地誌シリーズ6 ブラジル』 丸山 浩明編

ブラジルを地理学的視点と方法から総合的に読み解くためのテキストとして、政経略史、自然環境、環境問題、都市、民族社会、宗教、音楽、アグリビジネス、観光、日本移民、日本の中のブラジル社会にブラジルと世界・日本との関係を、11人の地理学者、研究者が分担執筆。中高教員の手引きや大学での教科書を想定

して纏められたシリーズだが、日頃ブラジルと関わる人達にも大いに参考になる基礎資料。(朝倉書店 2013年10月 176頁 3,400円+税)

☆『躍動するブラジルー新しい変容と挑戦』 近田 亮平編

21世紀に入り“未来の国”が未来に到達した新しいブラジルを、政治改革(堀坂浩太郎上智大学名誉教授)、経済の進歩(浜口伸明神戸大学教授・河合沙織神戸大学大学院)、企業の姿(二宮康史アジア経済研究所副主任研究員)、社会保障の試み(近田アジア経済研究所副主任研究員)、グローバル・プレーヤーの道を歩み出した外交(子安昭子上智大学准教授)、アグリビジネスやバイオエネルギー等の開発と持続可能性(小池洋一立命館大学教授)といった分野から、7人の気鋭のブラジル研究者が総合的に分析。

2013年6月の大規模民衆デモ勃発により加筆修正も行っており、現代ブラジルを理解する上で有用な解説書。(アジア経済研究所 2013年11月 211頁 2,600円+税)

☆『Vovô Ostra e Shiguebô (カキじいさんとしげぼう)』 畠山 重篤 エレナ・ヒサコ・トイダ訳

「牡蠣の森を慕う会」を結成し、漁民による河川上流の植林活動が続いている著者が子ども向けに森の大切さを説いた『カキじいさんとしげぼう』(講談社 2005年、カキの森書房 2012年再版)を、日系二世で上智大学のポルトガル語科教授によるポルトガル語訳。(カキの森書房 2013年6月 71頁 1,200円+税 - yukikoko@muf.biglobe.ne.jp に申し込めば事前振り込みで 1,200円+税のみで発送)

☆『群馬県ブラジル町に住んでみたーラテンな友だちづくり奮闘記』 中川 学

『僕にはまだ友だちがいない』でデビューした漫画家が、町の人口の約15%をブラジル系等ラテンアメリカ出身者が占める大泉町に短期間住んで、何とか友人を作ろうと奮闘するコミック・エッセイ。(KADOKAWA 2013年10月 154頁 950円+税)